

「紙から糸」技術 エジプトへ

福山 備後撚糸の特許に注目

パピルスを使った開発協力を

4人が訪問

福山市芦田町の備後撚糸（光成猛社長）が持つ、紙を糸にする特許技術にエジプトが注目し15日、国際協力機構（JICA）の協力でエジプト政府が設立した輸出促進機関（E.E.P.C.）の湯沢三郎シニアアドバイザーと、五輪柔道銀メダリストでパピルス製の絵画販売店を営むモハメド・ラシュワンさんら4人が同社を訪れた。パピルスの繊維を使った糸や生地の開発に協力を求めた。【和田有史】

や加工方法などを説明。光成社長から、紙や原糸のメーカーなどと連携すれば糸にすることも可能と聞き、「大変心強い」と話した。

エジプトの産業は近年、中国製品に押されて衰退気味で、国を挙げて独自産業を創出し、外貨獲得を目指す。

E.E.P.C.と日本貿易振興機構（ジェトロ）などを窓口にも、試作の可能性などを詰める。

パピルスを使った繊維製品などを開発し、年間1200万人の観光客やヨーロッパ向けの販売を検討している。湯沢さんが、雑誌に掲載された備後撚糸の和紙糸技術に目をとめ今回、訪問した。

ラシュワンさんは、84年のロサンゼルス五輪男子柔道無差別級決勝で山下泰裕選手と対戦して敗れ、銀メダルを獲得した。パピルスはナイル川沿岸に自生。薄くそいで最古の記述用紙として用いられた。パルプ原料の紙が登場して衰退、現在は

パピルスを使った糸や生地の開発の相談に訪れたラシュワンさん（左端）ら＝福山市芦田町の備後撚糸で

製品と原料のパピルスを持参し、繊維の性質を

装飾や土産用に生産されるだけになった。

